

京都 法金剛院と女御 待賢門院

京都市右京区花園扇野町（JR嵯峨野線、花園駅から丸太町通りを西へ約500m、北側）に現存する法金剛院は、平安初期の貴族・清原夏野（782～837年）の山荘があり、夏野の死後、山荘を寺に改めたものが当寺の前身であるという。その後、寺運は衰えたようだが、3世紀ほど経た平安末期（1130年）、待賢門院（1101～1145年）により再興された。待賢門院は藤原氏の出身で、鳥羽天皇の中宮であり、崇徳天皇、後白河天皇の母である。

最盛期の法金剛院には九体阿弥陀堂、丈六阿弥陀堂、待賢門院の御所などが立ち並んでいたというが、度重なる災害により、壮観だった当時の面影はない。なお、平安末期の浄土式庭園の遺構が1968年に発掘・復元されている。「蓮の寺」と呼ばれ、7～8月には池一面に白い大きな花が咲き誠に美しい庭園である。

我々は中高校で「保元、平治の乱」について学んだが、その中身は全く覚えていないので、女御、待賢門院と「保元、平治の乱」について纏めてみることにする。

白河法皇は、愛妾祇園女御の連れ子（養女）であった璋子（たまこ、後の待賢門院）を5才の時から自分の元で育てかわいがり溺愛した。璋子は美しく成長し、10代半ばになると、還暦を過ぎた法皇との良からぬ噂が宮中で広がった。いつまでも璋子を自分のそばに置いてはおけないと思った法皇は、璋子が17才のとき、法皇の孫で15才の鳥羽天皇に入内（じゅだい、中宮になること）させた。2才姉さん女房であった璋子と鳥羽天皇は仲睦まじく、2人の間に7人の子供が誕生した。長男の後の崇徳天皇（第75代）、さらに四男の後白河天皇（第77代）と、璋子は常に皇子、皇女達に囲まれて暮らしていた。

ここに、璋子より16才若く、美人の誉れも高かった藤原得子（なりこ、後の美福門院）は17才の時、鳥羽天皇に見染められ入内した。鳥羽天皇は、皇位を璋子の長男の崇徳天皇に譲位すると上皇となり、鳥羽院に引きこもり得子を寵愛した。目の上のたんこぶであった祖父、白河法皇が崩御すると、鳥羽上皇は自分が譲位した崇徳天皇を今度は無理やり退位させ、得子との間に生まれた2才の近衛天皇を即位させた。ところが近衛天皇は生まれつき病弱で17才で病死した。後継天皇を決める議定が開かれ、崇徳上皇の皇子、重仁親王が有力であったが、結局、雅仁親王（崇徳天皇の弟、後白河天皇）が即位することになった。

翌年、鳥羽法皇が崩御すると皇位を巡って朝廷が後白河天皇方と崇徳上皇方に分裂し、保元の乱（1156年）が起こる。この乱で活躍したのが、後白河天皇方につい

た源頼朝の父義朝である。平清盛は義朝とともに戦っている。義朝の父為義と弟為朝は崇徳上皇方について戦っている。

崇徳上皇方は、為朝が自慢の強弓で奮戦するが、義朝の作戦に従った後白河天皇方は、崇徳上皇の白河殿を襲撃して勝利をおさめた。崇徳上皇は讃岐（香川県）に流され、為義は斬首、為朝は伊豆大島に流された。以上が保元の乱の経緯である。

なお、これに続く「平治の乱」（1160年）では、源義朝、平清盛は敵味方に分かれ、清盛が勝者となり平家一門の隆盛が到来した。

璋子は、崇徳、後白河の二人の息子の骨肉の争いを見て、悲観にくれたであろうことは想像に余りある。璋子は法金剛院を再建しここで晩年を過ごし、44才で逝去した。当時、北面武士（鳥羽帝の警護にあたる近衛兵）であり天才歌人と誉れ高い佐藤義清（後の西行）は、絶代の美貌を謳われ、信仰心も深かった璋子を慕ったという。西行は72才で没するまで、畿内（吉野山・高野山）・東北（奥州）・四国を乞食行脚しながら和歌（うた）を詠み、京に還るたびに法金剛院に眠る璋子の墓参に訪れたという。

ところで保元の乱にて讃岐に流罪となった崇徳上皇については後日談がある。

保元物語によれば、崇徳は讃岐で五部大乘経を写本し反省の証に朝廷に差し出した。しかし後白河は受け取りを拒否し写本を送り返してきた。崇徳はこれに激怒して、自分の舌を噛み切り、その血で送り返された写本に次のように書き込んだ。

「日本国の大魔縁となり、この経を魔道に回向（えこう）す。」

「皇を取って民とし民を皇となさん」と。

そして爪や髪を伸ばし続け、夜叉のような姿になった。

1164年崇徳は46才で崩御し、讃岐、白峯御陵に埋葬された。火葬の煙は都の方角にたなびいたという。

慶応4年（1868年）、明治天皇は即位に先立ち、勅使を讃岐に遣わし、現地に崇徳上皇の社殿を造営した。そして崇徳院の魂をお迎えして京都御所のすぐ近くに白峯神宮（京都市上京区、堀川通りと今出川通りの北東角）を創設した。これは父である先帝、孝明天皇の遺志を受け継いだものと言われている。あれほど都へ帰ることを願いながら亡くなった崇徳院の実に700年ぶりの帰京となった。

余談となるが、御所のまわりの広大な緑地はもともと宮家や公家の住まいがあったが、東京への遷都により宮家や公家も京都を離れ、公家町は荒廃したと伝えられている。これを嘆かれた明治帝は自身のお手許金4千円（現在の金額に換算して1億6千万円以上）を京都府に対し12年間にわたり下賜し、御所の保全を命じた。こ

のため京都府は土地を買収して建物を撤去し、周囲に土塁を設けて植樹などを行い、門を設置した。そしてこの地に「御所に付随する苑地」という意味の「京都御苑」という名称を付けた。明治帝は皇太子の頃に欧米を視察し、何れの都市にも広大で美しい市民の公園があることに感銘を受けたことによるとも言われている。

S 3 5 年 卒 松岡謙一郎





法金剛院の蓮 2017-8-15 撮影



待賢門院像 (法金剛院蔵)